

# 景観を読む

# 土曜文化



土居 義 岳  
九大 大学院教授  
大建築史

九州国立博物館がオープンしてから一年半たった東京、京都、奈良につづく4番目の国立博物館である。創立の経緯からいって前三者はいわゆる日本美術を確立するものが目的であったとすれば、この九州のものは大陸や半島や東南アジアといった世界的な枠組みにおける九州の位置づけであり、歴史的な内容や形式にそれはあらわれている。

菊竹が設計したということにはあまり役ではなかったが、建築家としての長い経歴をみれば、彼は単なる機能主義でもなく伝統主義でもなく、文明的な広がりを感じていたのでないかと願う的には感じられるからである。

一九六〇年以降、彼はいわゆる「メタボリズム」を川添登と提唱した。建築は三物と物なように新陳代謝をする。この多様に解釈される主義が、しばしば機械的な機能主義を乗り越えるものとされつつ、じつはその発展形であるにすぎない面もあった。

菊竹の論理はそれ以上のものがあった。たとえば出雲大社にかんする論考のなかでは、福山敏男の復元案を参照しつつ、それが当時の最先端技術を展開した雄大なものであったこと、巨大性を追求する意志があったこと、その背景に進元族と外來族との政治的拮抗があったことを主張した。かつて半島や大陸との活潑な交流をとおして文明、そして建設技術が大胆に導入されたのである。

古代人に倣ったのであるが、彼の初期の作品にはどうした大胆さが顕著である。弟子であった伊東豊雄が気取とさえ呼んだものであった。

こうした初期の作品と、むしろおとなしいこの最新の博物館のデザインは、一見かなり異なっているように、じつは類似点が多いの気がつく。

たとえば大架構で建物全体を覆ってしまうという手法である。これはまず出雲大社の守舎（一九六三年）でなされた。長方形平面の長手方向に、スパン五〇メートルのアリテション梁を架けて、いっきに無柱空間をつくる。当選案よりも衝撃的だと評された京都国際会館（一九六三年）は鉄筋コンクリートでありながら木造建築の架構をスケールアップしたような緊張感を見せている。そして小規模だがやはり住宅を一つのシニール構造層で覆った自邸スカイハウス（一九五八年）などもそうであった。

また展示空間も上階ほどうすくすくする、いわゆるセッ

## 菊竹清訓の昔と今

トバックの構成を示している。これは一九七〇年代以降の高層住宅プロジェクトや、富士山麓の集合住宅パサティナ・ハイツ（一九七五年）などと同様である。上の階ほど後退しすれた床がくさび型断面のセミパブリックスペースを形成する。集合住宅では、その空間がコミュニティ形成にあてられる。博物館では、地形に対応するよまなかなかで床がすれゆくことで、そこがたんなる遊歩道ではなく、フンテグレートッド・フェーラムと名づけられたフレキシブルなホールとなる。これもまた国際交流のための場となるよう意図されている。

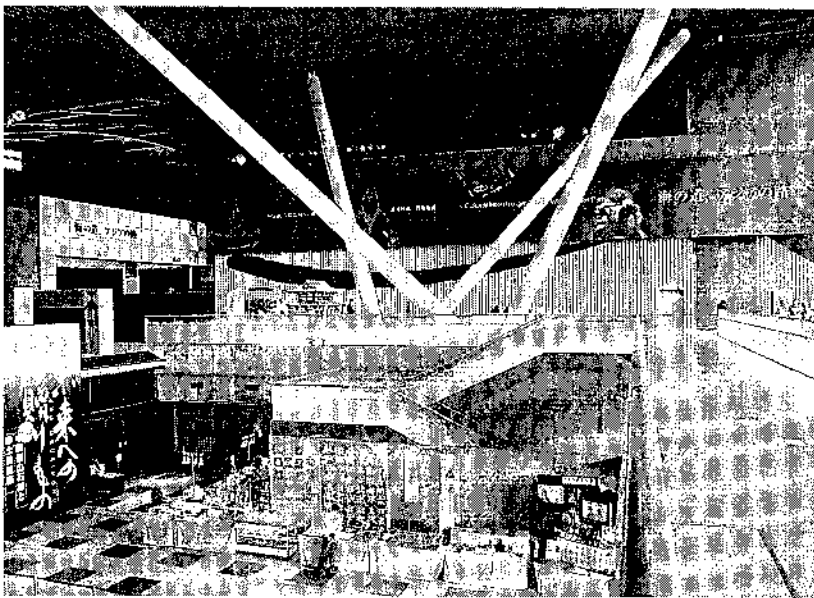
「これは建築家とキュリー」は建築家とキュリー。タはそれぞれ別の建築を手にしていくかのようである。すなわち倉庫と展示室では、アジア的な広がりのおかげで九州の造詣が位置づけられている。この空間は、発露構造によって昇降からいちど縁が切られていると同時に、屋根構造も密着していない。屋根構造とは直接の関係はないかのように、おぼろかにそれを覆っている。

しかし全体としては、山になじむようにデザインされたこの建物は、おとなしく儼しい建築である。

そういう取り壊しが決定された郡城市民会館（一九六六年）もまた、コンクリート

の基礎のうえに、鉄

取り壊しが決まった郡城市民会館。宮崎県都城で4月24日、木元勇撮影



九州国立博物館の内部。福岡県太宰府市で4月26日、出雲公雄撮影

## 文明論としての建築

近代建築の保存について困難なのは、状況は改善されつつあるとはいえ、その文化的価値を認める手続がじゅうぶんには確立されていないことである。今のところ、展覧会用品や設備を根拠とするしかない。しかしこれは権威主義的なやり方でもある。法隆寺も、ガウディの建築も、当時の最先端技術を使ったとはいえず、現在からすればその合理性は過去のものにすぎない。しかし合理性はなくなっても、埋没した人ひとがそれをももめた緊張感や感動として残る。それが文化ということもできる。都城にあって太宰府にないものである。

＊3カ月に一度掲載します。

近現代建築の保存について困難なのは、状況は改善されつつあるとはいえ、その文化的価値を認める手続がじゅうぶんには確立されていないことである。今のところ、展覧会用品や設備を根拠とするしかない。しかしこれは権威主義的なやり方でもある。法隆寺も、ガウディの建築も、当時の最先端技術を使ったとはいえず、現在からすればその合理性は過去のものにすぎない。しかし合理性はなくなっても、埋没した人ひとがそれをももめた緊張感や感動として残る。それが文化ということもできる。都城にあって太宰府にないものである。

近現代建築の保存について困難なのは、状況は改善されつつあるとはいえ、その文化的価値を認める手続がじゅうぶんには確立されていないことである。今のところ、展覧会用品や設備を根拠とするしかない。しかしこれは権威主義的なやり方でもある。法隆寺も、ガウディの建築も、当時の最先端技術を使ったとはいえず、現在からすればその合理性は過去のものにすぎない。しかし合理性はなくなっても、埋没した人ひとがそれをももめた緊張感や感動として残る。それが文化ということもできる。都城にあって太宰府にないものである。

近現代建築の保存について困難なのは、状況は改善されつつあるとはいえ、その文化的価値を認める手続がじゅうぶんには確立されていないことである。今のところ、展覧会用品や設備を根拠とするしかない。しかしこれは権威主義的なやり方でもある。法隆寺も、ガウディの建築も、当時の最先端技術を使ったとはいえず、現在からすればその合理性は過去のものにすぎない。しかし合理性はなくなっても、埋没した人ひとがそれをももめた緊張感や感動として残る。それが文化ということもできる。都城にあって太宰府にないものである。

